



紙から起こす

尾上菊之助

歌舞伎の演目『鶯娘』では、天からははらと雪が降ってきます。『金閣寺』の「爪先鼠」のくだりでは、雪姫に桜の花びらが散りかかります。これらは全部、細かく切った紙です。和紙を透かした行燈の光はやわらかく、世話物の破れた障子紙はその家の生活を表してくれる。紙は歌舞伎にとって、なくてはならないものです。

尾上の家の芸『土蜘蛛』の蜘蛛の糸は、紙を細く切ったものですが、お弟子さんに口伝で継承されていて、今作ることができるとは幕内でも数人だと思えます。投げる人に合わせて一番きれいな放物線を描ける大きさや長さ、重りを考え、相談しながら作る伝統技術です。毎回、六個か八個ずつ使うので、個数掛ける公演日分を作ってくれます。歌舞伎は少し前まで、台本ではなく

「書き抜き」という、各自の台詞だけを抜き出して書いた紙が配られていました。演目の話の筋やかけあいや皆がわかってからこそ、稽古で初めて合わせるということが成立したのです。今は台本をいただきますし、映像も資料も潤沢なので、それを見て勉強すれば何となくできてしまします。でも昔は先輩方のお芝居をよく見て、書き抜きに自分で書き込むしかなかった。教える側教わる側、心構えが違ったと思うのです。だからこそ今、先輩に伺いに行くということがなおさら重要になっていっていると思います。

祖父の書き抜きを見ると、びっしり書き込みがあって、もう自分で台本を作っていたようなものだと感じます。私も自分ならではの観点、道具の扱い、注意していただいたことを全部台本に書き込んでいます。そして次にそのお役をいただいた時に見返しながら、初日を迎えるのです。古典歌舞伎は台詞を一字一句変えず、型もたがえずにやると思われがちですが、私はそうではないと思っています。型や台詞回しができるのは当たり前で、その上で役をどうとらえるかは、十人役者がいれば十人とも違うのです。「役の性根をつかむ」とよくいうのですが、まず役になりきることに。その役がどんな感情で生きているのかを、それぞれが台本から心で読み取って演じることが一番大事なので。「紙から感情を起こす」というのでしょうか。だから歌舞伎は毎月、毎日、変化しているのです。伝統芸能でありながら、最先端を探して日々進化している演劇なのだと思います。



おのえ・きくのすけ●1977年、東京生まれ。七代目尾上菊五郎の長男。84年『絵本牛若丸』の牛若丸で六代目尾上丑之助を名乗り初舞台。96年、五代目尾上菊之助を襲名。女方と立役を演じ、「兼ねる」音羽屋を体現する。NHK連続テレビ小説『カムカムエヴリバディ』に桃山剣之介役で出演中。国立劇場令和4年初春歌舞伎『通し狂言 南総里見八犬伝』は1月3日～27日。

令和四年の初春歌舞伎で、私は『南総里見八犬伝』の犬塚信乃を演じます。前に演じた時の台本と書き込みを見返しながら、役を自分の中でどう進化させていくかですね。

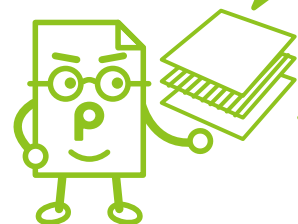
やはり新年は、お客様に初笑いをしていただけるような華やかな舞台。思い切り楽しめる趣向を父・菊五郎は考えています。この十月の舞台ではピクトグラムをやっていましたからね。その時々々の流行りものを入れていくのも歌舞伎の伝統です。

劇場では、お客様から力をいただいたり、私どもからもお返しするという、生なればこそその高揚感が生まれます。これからお客様と一緒に、あの時間を作っていきたいと思っています。

ペーパー君のつ・ぶ・や・き 活動

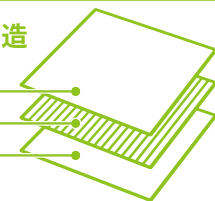
段ボールは、「3」がカギ。

1本ではもろい矢も、3本あわせれば強くなる。段ボールだってそうなんです。ライナと呼ばれる2枚のボール紙と、その間に入っている中しんと呼ばれる波形のボール紙。この3枚で支えあうことで、紙とは思えないほど頑丈に。なんと重さ1t以上のクルマを、段ボール4つで支えられるほどなんです。



段ボールの基本構造

- ボール紙 / ライナ
- 波形ボール紙 / 中しん
- 接着面



紙のことをもっと伝えたい。詳しくは、[「ペーパー君のつ・ぶ・や・き」WEBサイト](http://kamitsubu.com/)をご覧ください。

今回は3月31日号です。

提供 ● 日本製紙連合会 <http://www.jpa.gr.jp>

Photo : Hirofumi Kamaya